

令和元年6月6日現在

機関番号：16101

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K16723

研究課題名(和文)南朝梁・蕭綱文学集団における「現実」と「表現」

研究課題名(英文)A Study on Reality and expression in Love poetry by the Literary Group of Xiao Gang in the Liang Period of the Southern Dynasties.

研究代表者

大村 和人 (OMURA, Kazuhito)

徳島大学・教養教育院・准教授

研究者番号：80431881

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,900,000円

研究成果の概要(和文)：最終年度を含む本研究期間全体を通じて実施した研究の結果、蕭綱とその文学集団のメンバーおよび彼らの影響を受けた後世の詩人たちは、作品に用いる典型的キャラクターの用い方や作品の視点・構成に大胆な変更を加えることによって、現実を多角的に表現していたと考えることができる。そしてそれらの特徴は蕭綱の臨終作品にも見出すことができる。以上のことから、蕭綱の平時の艶詩作品は文学的に確かに豊かで新たな実りをもたらしたと結論付けることができる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

南朝梁・蕭綱とその文学集団の艶詩は「現実」から遊離した文学であると批判されてきた。この批判が言う「現実」の主な内容は当時の社会や政治の情勢である。しかし、「現実」の中身の範囲をより広げるなら、蕭綱らの艶詩にも彼らなりの「現実」の捉え方があり、しかもそれが蕭綱の深刻な臨終作品にも見出すことができることが本研究の成果によって明らかになった。この成果は、彼の文学集団のメンバーであり、南北朝文学から唐代文学への橋渡しをしたと位置づけられる北周・ユ信の文学の本質を理解する手がかりを提供し得るだけでなく、蕭綱らのような文学を生んだ中国文学のこれまで看過されてきた一面の解明にも繋がると考えられるのである。

研究成果の概要(英文)：We examined the relation between reality and expression in “Love poetry (Yanshi 艶詩)” by the Literary Group of Xiao Gang (蕭綱) in the Liang (梁) Period of the Southern Dynasties. From the results of studies, the following facts rose to the surface; Xiao Gang and members of his literary group approached facts from a different light, they made a change in typical character, viewpoints and construction in their literary works. These features are able to be found out from the works that Xiao Gang made just before his dying.

研究分野：中国古典文学

キーワード：艶詩 南朝 蕭綱 文学集団 現実 表現 臨終作品

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

## 1. 研究開始当初の背景

中国齊梁時代に流行した詩歌は、女性とそれに関する事物を題材とした艶詩であった。これを本報告書では齊梁艶詩と呼ぶ。梁代後期の艶詩の流行には蕭綱とその文学集團のメンバーが中心的役割を果たした。齊梁艶詩は後世に継承されたが、その一方でその詩風に対する批判も現代まで途切れることはない。現代の学者は艶詩が梁代に大流行した原因を考察しているが、それらの結論は次のように集約される。「艶詩制作の主な担い手の多くは、皇帝・皇族・貴族および彼らに追従しようとした者たちである。彼らが制作した猥褻な艶詩には、儒教思想に違反した思想信条を持ち、現実から遊離した頹廢的な生活を送っていたことが反映されている。このような艶詩は中国の伝統的な詩歌の歴史から乖離したもので、価値は低い。」

しかし、この「定説」と矛盾する事実が少なからず存在する。それらの事実は、齊梁艶詩が儒教思想から乖離したものではなく、むしろ儒教思想の伝統に沿ったものではないかという仮説を立てることを可能にし、従来の齊梁艶詩に対する評価だけでなく、齊梁艶詩を異端とする中国文学史観に対しても再考を促すものである。

近年、中国では齊梁艶詩に関する研究書が立て続けに出版されている。それぞれ、独自の視点から齊梁艶詩の全体像を描き出そうとしており、啓発される点も少なくない。しかし、いずれの先行研究も上記の事実を無視し、概して個々の作品に対する詳細な分析と考察はいまだに不足しており、結局のところ齊梁艶詩の本質を十分に明らかにしているとは言いがたい。**齊梁艶詩をどのように評価するにせよ、まずは作品そのものに向き合い、その特徴の諸相を探ることが必要ではなからうか。**

本研究代表者はこれらの問題意識から出発し、まずは艶詩そのものを研究することから始め、まず齊梁時代に模擬作品が多数制作された「三婦艶」とその母体作品である「相逢行」および「長安有狭斜行」という一連の楽府を取り上げた。それらの作品を取り上げた論考の中で代表者はそれらの古辞とその内容や構成を継承した後世の模擬作品に共通して見られる特徴的表現やモチーフを抽出してそれらの源流と意味を探ることによって、一連の作品群の主題を再考察した。また、作者たちが創作の実態や文学思想を述べた文章も取り上げ、艶詩制作を支えた思想に対しても再考察を加えた。その結果、上記の作品群に見られる特徴的な表現やモチーフは、先行する祭祀歌や公讌詩という作品を淵源としており、作品は天下の平和と人々の和合を言祝ぐ主題を有し、これらの作品だけでなく、作者たちの文学思想とその創作のあり方も儒教思想に違反しないものであったという結論を得た。

また、平成22年度から25年度までの科学研究費補助金の援助を受けた「中国齊梁時代『艶詩』の新研究」(若手B22720143)において、齊梁時代の上記以外の楽府作品およびそれに先行する作品も取り上げ、各々の特徴的な表現やモチーフの淵源と意味の考察を行った。その結果、それらの作品の特徴的表現やモチーフは上記の「相逢行」とその関連作品群の模擬作品と同様に祭祀歌や公讌詩という作品に由来し、根底には儒教思想に基づく伝統的幸福観が存することを発見した。

上記の通り、代表者がこれまでの齊梁艶詩研究において主に取り上げてきたのは楽府の模擬作品であったが、このジャンルの作品は古辞の内容や表現の拘束が強く、虚構性が比較的高い。そこで応募者はこの科学研究費補助金研究の締めくくりとして、楽府以外のジャンルの作品も対象に選んで研究を行った。取り上げたのは、梁末の大乱の末期、蕭綱が死の直前の幽閉期間に制作したとされる、「被幽述志」詩と「連珠」三首という臨終作品である。研究の結果、以下のような結論を得ることができた。第一点目として、全ての臨終

作品において蕭綱は己と梁朝の核心的思想が儒教であると規定した。第二点目として、「連珠」其二では儒教思想に基づいて梁末の大乱の原因を反省したが、その内容は理想的かつ抽象的なものである。第三点目として、文学的観点から言えば、「連珠」其二以外の作品において過去の反省は見られずに、現在あるいは未来の己や梁朝の状況に対する悲傷を強調する。そして第四点目として、「被幽述志」詩と「連珠」其一では己自身を客体化する表現態度が見られる。これらのことから、蕭綱の臨終作品には、儒教思想に基づく伝統的幸福観の実現からはほど遠い厳しい現実と、その中の自己の状況に対する彼の認識が表現されていることが確認された。蕭綱以前の臨終作品と比較すれば、彼の臨終作品の特徴は特異である。次に問題となるのは、彼の臨終作品に見られた特徴は、死を目前にするという特異な状況下で生み出されたものなのか、あるいは平時の作品に既に見られたものなのかという点である。これが本研究開始当初の時点で代表者に課せられた問題であった。

## 2．研究の目的

以上の問題意識により、本研究では、蕭綱とその文学集団の艶詩詩人たち、また彼らの影響を受けた後世の詩人が制作した、何らかの現実的要請に応じた作品や、現実に対する認識が表された作品、またそれらのような作品で用いられたモチーフまたキャラクターを研究対象とした。そしてそうすることによって、蕭綱の平時の艶詩や関連作品における「現実」と「表現」の関係を研究し、蕭綱の臨終作品に見られた特徴が彼および彼の文学集団メンバーの作品に既に見られたのか否かを探ろうとした。上記のように、蕭綱たちの艶詩は現実から遊離したと批判されてきた。本研究により、彼らなりの「現実」と「表現」との関わり方の一端を明らかにしたい。これが本研究の目的である。

## 3．研究の方法

本研究は、代表者の従来の研究方法を継承して行った。まず上記の研究対象作品の本文を複数の書物を用いて校勘した上で、作品を日本語に翻訳した。次に対象作品に見られる特徴的表現やモチーフを抽出し、他の作品や資料とも比較し、文学だけでなく、他分野の先行研究の成果も参照しながら、対象作品の分析を多角的に行った。

## 4．研究成果

(1)【平成27(2015)年度】本研究の研究期間の開始年にあたる2015年6月に刊行された拙稿「美女に贈る詩 梁簡文帝蕭綱の「戯贈麗人」「絶句賜麗人」について」は実際には前年度の研究の成果であるが、問題意識は本研究と密接に繋がっている。この論文は蕭綱が実在の女性に贈った艶詩の特徴を論じたものだが、研究の結果、その作品には羅敷古辞や曹植の「洛神賦」等の典故を用いて作者自身の立場を引き下げることによって、相手の女性の美しさ等を際立たせる技法が見られ、この技法は蕭綱の臨終作品の一つに見出すことができる特徴と一致することを明らかにした。この研究で明らかになったように、羅敷古辞の主人公である羅敷や「洛神賦」のヒロインである宓妃のようなキャラクターは、作者自身の立場を引き下げのような、現実に揺さぶりをかけるモチーフとして上記のような艶詩で機能しているのである。南朝期における羅敷古辞の受容については既に多くの先行研究があるが、南朝期における「洛神賦」の受容の研究は少ない。

そこで、下記「主な発表論文等」の雑誌論文「あざわらわれた洛神 南朝陳・顧野王の「艶歌行」をめぐって」では南朝梁陳時期の「艶歌行」という作品群に見られる特徴

を抽出し、その意味を探った。この論文では梁代から文学活動を始め、陳代で活躍した顧野王という詩人の「艶歌行」三首を主要な研究対象とした。これら三首の分析と梁陳時代の他の詩人の作品との比較の結果、顧野王のこれらの作品は梁代の蕭綱や他の詩人の作品のテーマや特徴を継承しつつ、より多面的な女性像を造形しようとしており、陳代の詩風への過渡期的作品群と位置づけることができるという結論を得た。また、顧野王の「艶歌行」其二の中には「洛神賦」の宓妃をあざわらうという表現が見られるが、このような表現は南朝宋に始まり、梁代の作品で宓妃は他の女性キャラクターの引き立て役となっていた。しかし、このことは宓妃というキャラクターが南朝期に既に典型的な神女として見なされていたことの裏返しでもある。

以上のように代表者はこの「あざわらわれた洛神」と別稿「美女に贈る詩」の二論考で「洛神賦」の宓妃というキャラクターを取り上げ、梁陳を中心とする南朝期の詩歌における描かれ方を研究した。その結果から導き出せることの一つは、何らかの典型と化したキャラクターは、新たな表現やモチーフを生む触媒となったり、作中においてそれ以前の同種の作品とは視点を殊にして、現実に揺さぶりをかけたりするものともなったということである。梁代の蕭綱とその影響を受けた詩人たちは、宓妃という一つの典型的なキャラクターを多様な方法で詩歌に取り入れ、新たな意匠をもち、現実に揺さぶりをかける作品を生み出していったのである。

(2)【平成 28(2016)年度】下記「主な発表論文等」の雑誌論文 「南朝梁「内人」詩のテーマと視点」は学会発表 「南朝齊梁艶詩に見える「内人」「中人」について」の内容に加筆と修正を加えてまとめたものである。梁代には妻妾を指す「内人」を詠った作品が急増し、特に蕭綱が制作した作品は軽薄で猥褻な艶詩の代表として、先行研究によってしばしば厳しく批判されてきた。それらの研究は「内人」を一般的な女性として取り扱ってきたが、「内人」が妻妾であることや、作品自体の特徴は深く追究されなかった。そこで本稿では梁代の「内人」を詠った作品を分析して、妻妾を詠った梁代の他の作品と比較し、「内人」詩の特徴を探った。その結果、「内人」詩は男性と「内人」の小世界の「内」「外」を弁別し、「外」へも視線を向けるという共通点を有し、そのことによって男性と「内人」の幸福をより際立たせることが明らかになった。このテーマは当時の文学の風潮と軌を同じくするものであったが、右の特徴に別の作品群とは異なる新味を認めることができ、「内人」詩が制作された意味を見出すことができる。

(3)【平成 29(2017)年度】下記「主な発表論文等」の学会発表 「南朝齊梁「率爾」詩考」では、何らかの呼びかけ等に反応してその場において即興で制作された「率爾」詩に焦点を当て、その中でも三月三日の曲水宴を題材としたものを主な研究対象として取り上げ、分析を加えた。本発表では更に曲水宴を題材とした公讌詩との比較も行い、その結果を発表した。学会発表の場では様々な貴重な意見をいただき、現在それらを反映させた論考をまとめている最中である。この論考が完成すれば、学術雑誌に投稿する予定である。

(4)【平成 30(2018)年度】下記「主な発表論文等」の雑誌論文 「南朝梁・蕭綱文学集団の「戯題詩」について」では、題名に「戯」という語が見える梁代の「戯題詩」を取り上げた。研究の結果を総括すれば、梁代の戯題詩に見られるのは、先行作品や常套的な構成・内容を異なる視点から大胆に捉え直し、対象のある一面とは別の一面に焦点を当て、作品世界を多角的に再構築する技法である。各作品の制作の状況は不明だが、作品そのものに拠る限り、右の特徴はもはや文学的技法と呼べるものである。これらのことは上記別稿「美女に贈る詩」で取り上げた蕭綱の「戯贈麗人」にも見出すことができる。蕭綱等の

戯題詩の制作は、梁代の艶詩に新鮮で豊かな実りをもたらした試みであったと考えることができる。

(5)【平成30(2018)年度】2018年度計画の対象として挙げた「連珠」作品は政治に対する諷刺や道徳の箴言を述べる美文体である。梁代にこのジャンルの制作が流行したが、その作者の中には蕭綱とその文学集団のメンバーである劉孝儀の作品も含まれる。本稿では梁代の「連珠」の制作状況を調査し劉孝儀の作品を主要研究対象に選んで精密な読解を行い、艶詩や他の作者の「連珠」と比較することにより、その特徴と当時における意義を探った。その研究結果をまとめて近日中に発表する予定である。

本研究の成果をまとめると、蕭綱とその文学集団のメンバーおよび彼らの影響を受けた後世の詩人たちは、作品に用いる典型的キャラクターの使い方や作品の視点・構成に大胆な変更を加えることによって、現実を多角的に表現していたと考えることができる。(3) および(5)の論考は現在執筆中であるが、それらで取り上げた作品も同様の特徴を有するという見通しを代表者は持っている。これらの特徴は蕭綱の臨終作品に見られる特徴に通じるものである。以上のことから、蕭綱の平時の艶詩作品の特徴は彼の臨終作品にも活かされ、学術的に確かに豊かで新たな実りをもたらしたと結論付けることができる。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 3 件)

大村 和人「南朝梁・蕭綱文学集団の「戯題詩」について」、中国文化学会『中国文化研究と教育』第77号掲載決定、2019年、査読有り。

大村 和人「南朝梁「内人」詩のテーマと視点」、六朝学会『六朝学会報』第18集37-52頁、2017年、査読有り。

大村 和人「あざわらわれた洛神—南朝陳・顧野王の「豔歌行」をめぐる—」、三国志学会『狩野直禎先生米寿記念 三国志論集』265-291頁、2016年、査読無し。

〔学会発表〕(計 2 件)

大村 和人「南朝齊梁「率爾」詩考」、六朝学会 第35回研究例会、2017年

大村 和人「南朝齊梁艶詩に見える「内人」「中人」について」、六朝学会 第20回大会、2016年

〔その他〕

ホームページ等

researchmap

URL: <https://researchmap.jp/hdacun>

徳島大学ホームページ・教育研究者総覧

URL: <http://pub2.db.tokushima-u.ac.jp/ERD/person/337278/profile-ja.html>

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。